

# 学 位 論 文 の 要 旨

三 重 大 学

所 属	甲 三重大学大学院医学系研究科 生命医科学専攻病態修復医学講座 肝胆膵・移植外科学分野	氏 名	大 倉 康 生
<p>主論文の題名</p> <p>“Benefit of technetium-99m galactosyl human serum albumin scintigraphy instead of indocyanine green test in patients scheduled for hepatectomy”</p> <p>主論文の要旨</p> <p>【背景・目的】</p> <p>肝切除を予定する患者において術後肝不全を予防するために肝予備能を正確に評価することは非常に重要である。日本においては、ICGR15を用いた幕内基準が広く使用されている。一方、最近では 99mTc-GSA シンチグラフィーより得られる LHL15 値は正確に肝機能进行评估することが可能であり、手術術式の決定に用いられている。しかし、実地臨床において ICGR15 値と LHL15 値の間に 8~17%に乖離が生じており、手術術式の決定において混乱することがある。そこで、ICGR15 値と LHL15 値の乖離を引き起こす因子に着目して、99mTc-GSA シンチグラフィーを行うことを利点が得られる患者を評価する目的で本研究を行った。</p> <p>【対象と方法】</p> <p>2006 年 1 月から 2010 年 12 月までに行った連続する肝切除 197 例を対象とした。これらを ICGR15 値が 15%未満を ICG-good,15%以上を ICG-poor とし、また LHL15 値が 0.9 以上を LHL-good, 0.9 未満を LHL-poor とし、ICG-good/LHL-poor と ICG-poor/LHL-good を乖離群と定義した。術前各種肝機能検査、背景肝組織所見、手術術式、術後合併症、術後肝不全、術後死亡についてそれぞれ比較検討した。</p> <p>【結果】</p> <p>197 例は ICG-good/LHL-good 群 (n=114), ICG-good/LHL-poor 群 (n=11), ICG-poor/LHL-good 群 (n=36), ICG-poor/LHL-poor 群 (n=36) の 4 グループに分類され、乖離群は 47 例 (23.8%) であった。ICG-good 125 例において、ICG-good/LHL-poor 群では ICG-good/LHL-good 群と比較して背景肝組織所見では肝硬変の割合が有意に多く、術式では 2 区域以上の肝切除を行った割合が有意に低かった。ICG-poor 72 例において、ICG-poor/LHL-good 群では ICG-poor/LHL-poor 群と比較して背景肝組織所見では肝硬</p>			

変の割合が有意に低かった。多変量解析にて ICG-good 例において乖離を引き起こす因子を検討すると、C 型肝炎の感染が認められた。ICG-poor 例において乖離を引き起こす因子を検討すると血清アルブミン値とヒアルロン酸値が認められた。

#### 【結論】

99mTc-GSAシンチグラフィーは術前肝予備能をICGR15より正確に評価することができる検査である。今回の研究ではICGR15とLHL15の検査において、約20%の患者に乖離が見られており、ICGR15値が良好なC型肝炎患者や、ICGR15値が不良な血清アルブミン値やヒアルロン酸値が良好な患者においては乖離の可能性が考えられるため、99mTc-GSAシンチグラフィーは特に有用な検査であると考えられた。